

『飼育』 (大江健三郎) 考

吉田俊彦

はじめに

『飼育』は文芸雑誌「文学界」(昭和33・1)に発表された作品である。昭和三十三年三月に出版された『死者の奢り』の跋文によると、この当時の作品を貫く主題は「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考へること」にあったが、江藤淳はこの大江健三郎自身の主題説明について、注①「ここでいう「監禁状態」とは、時代的にいえば一種の閉塞状態であり、存在論的にいえば、「社会的正義」の仮構をみぬいたものの一種の断絶感である。この二つが二重写しになっているところに、いわば大江健三郎の独創性がある」と整理している。

朝戦戦争勃発(昭和25・6)と警察予備隊令の公布(昭和25・8)、レック・ド・ページ(昭和25・7)と戦時中の政治責任者の追放解除(昭和25・8)、アメリカを中心とする西側諸国との片面講和条約と日米安全保障条約の締結(昭和26・9)、警察予備隊から保安隊への改組(昭和27・10)、破壊活動防止法の制定(昭和27・7)、そして、教育二法の施行(昭和29・6)と警察法の改正(昭和29・6)など、時代逆行の趨勢が示す様々な戦後の成果の空無化を、時代的閉塞状況を生み出す要因として考へる時、新たな生の存立基盤を模索する試みは、当然、苦渋に満ちたものになっていたと見なければならぬ。

この小論では、閉鎖的な谷間の村落共同体の中で暮らす主人公「僕」の

生活感性の特徴と外的勢力と対決しなければならぬ時の「僕」の対応姿勢の特徴とに注目し、注②「森林的思考」を出発点とする大江健三郎の作家的原拠を尋ねてみたい。

一 「僕」の生活感性の特徴

『飼育』は、町から隔絶された谷間の村落で暮らす子供たちの充実した生活のうち、火葬場において「死者の骨」探しをする場面から描きはじめられている。茶毗に付す死者の骸を「大人たちの腰の間から覗き見」た時の恐怖や不快が無気味な「死者の臭い」に怯えながらも「胸にかざる記章に使える形の良い骨」を夢中で探し求め、また、それが見つけ出せないと、「小学生の仲間誰かを殴りつけて」でも入手しようとする「僕」の行為と執着は、町の子供たちの想像を絶した異常なものと言わなければならない。しかし、この衝撃的に開示される「僕」の反日常的な生活世界は、次のような豊かな自然描写に支えられ、自然と合体しながら生きる山村の子供たちの健康な生命力の躍動を覗かせはじめるのである。

《谷底はすでに、夕暮と霧、林に湧く地下水のように冷たい霧におおいつくされていたが、僕たちの住む、谷間へかたむいた山腹の、石を敷きつめた道を囲む小さい村には、葡萄色の光がなだれていた。僕は屈んでいた腰を伸ばし、力のない欠伸を口腔いっばいにふくらませた。弟も立ちあがり、小さい欠伸をしてから僕に微笑みかけた。》(傍点引用者)

谷底の夕暮時の情景が「霧」と夕日の「光」と「僕」および「弟」の「欠伸」によって纏められているが、霧の「冷たい」感触を捉える「林に湧く地下水のように」という比喩とか、また、夕日の「光」を形象化する「葡萄色の「なだれ」という表現には、対象の核心を凝縮し、自然の鼓動を響かせる作者自身の繊細鋭利な感性の結晶とともに、情景の語り手「僕」の感性を支えている豊かな自然風土の広がり、その風土の中に深く根を下ろして生活する「僕」の生活呼吸を見落すことができない。「僕」の「力のない欠伸」と「弟」の「小さい欠伸」は、「弟」の「微笑」と呼応し、「死者の骨」探しという異常性を帯びた反日常的仕事の底気味悪い疲労感を柔らげ、豊かな

自然風土の鼓動に合わせて生きる兄弟の、充実した一日の終結とその思いを確認しあう心の温もりを浮びあがらせている。

「骨」探しに失敗した「僕」らとは反対に、「山犬」狩りに成功して「僕」らの帰りを「村の入口」で待ち受ける「兎口」には、自然風土の中に深く根を下ろして生きる山村の子供たちの、厳しい生の戦いと重い生の充足感が一層鮮明な形で具象化されている。「僕」との約束を破って一人山に行き、仔犬を入手した「兎口」に対する「僕」の不満と非難、「腕」と「胸」と「頸」に負った多くの咬み傷と一緒に成果をひけらかす「兎口」の得意と満足、そして、それを前にして脹らむ「僕」らの羨望……、ここに浮び出ている子供たちの生活様相からは、ただ、無垢な魂のみを持ちつづけて生きる少年像を思い描くことはできない。解放された自然的情動を基軸に、知力、体力、気力の限りを尽し、自然と仲間とのすさまじい戦闘と静穏な親和を交互に重ねる「僕」らの生活には、奥深く無気味な自然の生命力と合体する衝動的な残酷性も強く生きているのである。

《兎だといってなぜこの醜い女は軽蔑しているのだろう、人間にはどんな醜い人間でも、獸をはかにする権利があるのだろうか、へぼくの父が死ぬ時、その眼は兎が死ぬ時にする眼とおなじだった、(略)》(略)死んでゆこうとしていた孤独な兎(略)その眼には青く暗い森がうつっており、いかなる兎の生命の匂いのするものもその眼にはなかった。激烈な怯え、無力感、恐怖、そしてそのあとに青く暗い森だけが深く広くひろがってゆき、兎の生命を、この森のもっとも敏捷な行動者であった兎の生命を吸いとってしまうのだ。(略)兎は、モグラに転生したように、茸の匂いのする落葉とその腐植土のなかに鼻面をうずめ、そのまま死んでしまうのだ。》(『遅れてきた青年』第一章、傍点引用者)

これは『遅れてきた青年』第一章の一節であるが、主人公・「わたし」の生活感性は、『飼育』の主人公・「僕」の具有している感性和同質のものと違ってよからう。その特徴の第一は、人間の命と森林の動植物の命とが緊密に連鎖合体していることである。「怯え」と「無力感」と「恐怖」のあと、「青く暗い森だけが深く広くひろがってゆく」兎の眼から、「森」が「兎の

生命」を「吸いとってしまうのだ」とする判断、また、「茸の匂いのする落葉とその腐植土のなかに鼻面をうずめ、そのまま死んでしまう」姿からは、「モグラに転生したよう」な生を思う連想、そして、その死を告げる兎の眼と同じ「父」の眼を見て「父の死」を覚悟する「わたし」の生活感性には、人間と森林の動植物との円環的な連鎖構造を認識基底に持つ森林的思考の特徴が最も典型的な形で顕われている。

『飼育』における「僕」の「死者の臭い」から「甲虫の一種」の「粘つく分泌液のような」悪臭を思う連想、「兎口」の負う犬の咬み傷を「ふきでている」「芽」のように感知する見立て、「村の上空を通過し始めた敵」の飛行機」を「珍らしい鳥の一種にすぎない」ものとして安心する判断、そして、墜落機から捕縛した黒人兵を「獸」として「飼育」生活感性にも、『遅れてきた青年』の「わたし」と同一の「森林的思考」の特徴を捉えることができる。

第二は激烈な競争心をもって争う残酷な制圧的衝動である。

《わたしには(略)病患をなおす力はなかった。泣きながら兎の皮を剥ぎ、新聞紙を谷川で濡らして(略)人間よりもなお裸の人間を思わせる赤い兎の皮を剥がれた体を巻いて土に埋め、その上で小さな焚火をし、むし焼きにして食べてしまうことができるだけだ。(略)密猟者は獲物の略奪者に憎悪をもち、森のなかに数かずの奇妙な跡け兎、皮だけの跡け兎の像が立ち、小さな山火事の危険が人知れずたびたびおこされ、わたしと弟が地主たちのように肥る。》(『同』第一章、「跡け兎」以外の傍点引用者)

『不意の啞』の「少年」は「谷間のはずれ」に「自分の猟場」を持っているが、「密猟者」の存在実態の説明から推して、この『遅れてきた青年』の山村においても、狩猟権が何らかの方法で特定の人間に与えられていると見てよからう。「わたし」と「弟」は、「密猟者たちよりも早起き」をするこ

とによって密猟者の獲物を略奪し、「地主たちのように肥る」のであるが、掟を破り罫を仕掛ける密猟者の獲物獲得の執念と密猟者たちの先を越して略奪した獲物の「むし焼き」に舌鼓を打つ「わたし」の欲念とは、共に、激烈な競争心をもって、自然と敵対者とを屈伏させようとする残酷な制圧衝動を

捉えることができよう。ここには、「町」の生活文化を支える倫理規範の入り込む余地は見当らない。

この衝動は、『飼育』の世界においても、健康な生活の充足感を生み出す力となって横溢している。火葬場で「記事に使えぬ形の良い骨」を探し当てることができず、「仲間の誰かを殴りつけ」ても「それを奪わねばならない」と決意する「僕」の思い、「皮帯を喉にまいて武装」し、「躰中を山犬に咬みつかれながら枯れた草や灌木で作られた巢穴」から仔犬を捕獲する「兎口」の戦い、全身に負う咬み傷をひけらかしながら仔犬を誇示する「兎口」の得意と満足、仔犬が逃げ出した時、「酒のように血をたぎらせて笑う」「僕」と「弟」の痛快さ、「明りとり」から黒人兵を覗く「僕」らの特権を「侵害する者」に行う残酷な報復、そして、黒人兵を打ち殺す「父」の「鉦」で砕かれた「僕」の「掌」を「ひどく臭うなあ」と言ってみつめる「兎口」の闘争心……、これらは、奥深く無気味な自然の生命力と合体する衝動的な残酷性をもって、敵対者と峻厳に抗争対峙する力学構造を作りあげている。

第三は「僕」の心を重くふさぐ村の「静寂」である。

《谷間には深く深く静寂が、喰いこんでいるのだった。静寂の木の根。そしてその毛細管的な先端は子供らの柔らかい脳のひだひだに届いている。この静けさについてわたしは夢を見た、大きい男、山のように大きい男が暗い夜に黒っぽく体をかげらせて横たわり、いま息絶えんとしている、その大男が村だったのだ。大男はまた、わたしの父だったし、村の死者すべだった。この静寂の根がわたしの胸の奥に届いて小さな枝根を成長させるにつれて、わたしは無気力な態度 ものぐさ、黙りこむ癖を、その一連の衰弱のしるしを自分のものにしたのだった、そしてそのかわりに狂気が消えさった。》（『同』第二章。「しるし」以外の傍点引用者）

『遅れてきた青年』の主人公・「わたし」は、谷間に「深く」「喰いこんでいる」「静寂」を、「夢」の中で、「暗い夜」「黒っぽく体をかげらせて横たわり、いま息絶えんとしている」「大男」として感受しているが、この男が「村」であり、「父」であり、また、「村の死者すべ」でもあるとあるという説明部に着目する時、谷間に「深く喰い込んでいる」「静寂」は、

「無気力」で「ものぐさ」で「黙りこむ」「衰弱」の歴史を背負った「谷間」の精神的風土を象徴するものと見ることが出来る。「静寂の木の根」が「わたし」の「胸の奥」で「小さな枝根を成長させる」につれて、「わたし」が「無気力な態度、ものぐさ、黙りこむ癖」に陥るのは必然の成り行きと言わなければならない。

『飼育』の主人公・「僕」の胸中にも、谷間の「静寂の木の根」が徐々に「枝根」を拡げはじめようとしていることは、十分に想定し得ることである。《馳の毛皮をぐるぐるまきにして、裂いた南京袋にくるんだものが父の膝にたてかけてあるのを見て、僕は息をのみへ町へ降りるのだ、と考えた。そして黒んぼのことを役場へ報告するのだろう。／言葉が僕の喉の奥でうずまき、食事の速度を遅らせるほどなのだが、僕は父の粗い髭におおわれた逞しい下顎が穀粒を咀嚼するようにたえまなく動くのを見て、父が不眠のために神経を痛めつけ苛立たせていることを知るのだ。黒人兵について訊ねることはできない。》（傍点引用者）

「粗い髭におおわれた逞しい下顎」を持つ「父」は、「山のように大きい男」のイメージと重なり合うものである。この「父」を前にして、「僕」はただ「見る」という行為のみをもって判断と理解を示している。会話を持たない「静寂」の中で、「見て」「息をのみ」「考え」、そして、「見て」「知る」ことのできる「僕」の胸中には、谷間の「静寂の木の根」が「枝根」を大きく拡げていると言う外はない。しかし、この「静寂」は作者・大江健三郎にとって、容認し得るものとは考えられない。「僕」を中心とする子供たちの生活体制の中に、行政機関の政治的措施を呼び込む黒人兵を生活させる状況設定には、「静寂」の具体的な構造実態を見極めるとともに、歴史と政治を背負って暮らす人間の生活力の源泉と新たな生への変革方向を探ろうとする認識志向を読み取ることが出来るのではなからうか。ここで、巨大な「他者」と「僕」の生活変化との関係に注目してみたい。

二 巨大な「他者」と「僕」の生活変化

谷間の村落の日常生活に衝撃を与えた巨大な「他者」としては、墜落機か

ら落下傘で脱出して村人に捕縛された黒人兵を挙げる事ができる。黒人兵は村の地下倉に抑留されることになるが、地下倉の暗がりの底に蹲る黒人兵の形象イメージで重要なことは、それが村の「静寂」の象徴である「暗い夜」「黒っぽく体をかげらせて横たわ」る「山のような」「大男」のイメージに重なり合うことである。このイメージと重なり合う黒人兵は、谷間の外の世界において「静寂」を保ちながら、「衰弱」を待ち受けている巨大で無気味な外在的「他者」の象徴と解することもできよう。

「父」にとって、黒人兵は憎悪すべき敵兵であるとともに、嫌悪すべき「獣」に過ぎないものであるが、「僕」にとっては、謎に満ちた無気味な「大男」が「父」でもあり、「村の死者すべて」でもあるように、地下倉の暗がりに蹲る黒人兵は、外在世界の自然的文化的総体を感じさせる重い存在であったと考えられる。

《黒人兵は長いあいだ、僕が入って来た時のままの姿勢で食物籠を見つめつつけ、そのあげく、僕が自分自身の空腹に痛めつけられ始めるほどのだ。そして僕は、(一)黒人兵が僕の提供する夕食の貧しさと僕らとを軽蔑して、決してその食物には手をつけないのではないかと考えた。(二)羞恥の感情が僕をおそった。(三)黒人兵があくまでも食事にとりかかる意志を示さなかつたから、僕の羞恥は父に感染し、(四)父は大人の恥辱にうちひしがれやぶれかぶれになって暴れ始め、そして村中が恥に青ざめた大人たちの暴動でみだされるだろう。》(傍線引用者)

傍線部(一)の「僕らの提供する夕食の貧しさと僕らを軽蔑して」「食物に手をつけないのではないか」という「僕」の懸念は、「《町》で汚い動物のよりに嫌がら」れ、そして、小学校の女教師からは「汚れていて臭くて厭だ」と蔑まれ、また、町役場の書記からは「蛙」と軽んじられている貧しい村の生活文化に対する劣等感が大きく作用していると言えるが、この懸念を持つ時点の「僕」の心を襲う傍線部(二)の「羞恥の感情」は、子供仲間のエゴイズムとの戦いの中で、本能的な闘争力と野性的な強靱さを発揮しながら、自己の欲念を反射的に満たして生きる「兎口」などの与り知らぬものである。つまり、この「羞恥の感情」は、誇り高い選良意識と恰拙な批評精神を持ち合

わせながら、自己の面目を計測的に守ることをも怠らない「僕」の思慮分別と美学のもとではじめて動く感情と言わなければならない。

「僕」が傍線部(三)において、自分の「羞恥の感情」が「父」に「感染」することを想定し、さらに傍線部(四)においては、その「感染」が「父」および「村中」の「大人」に「大人の恥辱」と「暴力」を喚び起こすことを憂慮するの、この「僕」の思慮分別と美学によってはじめて可能なことであり、この時点における「僕」は、閉鎖的な山村共同体の生活感性に深く根を下ろしている、自己の生の原拠を明確に自覚し得ていたと見ることができよう。

「黒人兵」という巨大な外在的「他者」が「僕」に与えた第一の影響は、「僕」に自己の生の原拠を確認させたことに外ならない。

やがて、黒人兵が食事をとりはじめたことよって、「羞恥の感情」から解放された「僕」が、「黒人兵の力にみちた咀嚼」を見守りながら「すばらしい《獲物》」であったことを実感する心情的特徴は見落せない。この時点における黒人兵は、「僕」および「僕」の住む山村共同体の生活文化の水準に遠く及ばない動物的野人に転落したのである。「僕」の眼に映る黒人兵の特徴は、「煤色の炎をもえあがらせる」「縮れた短い」(傍点引用者)頭髮をはじめとし、「狼のそれのように切りたつた耳」、「内側に黒ずんだ葡萄色の光を押しくるんでい」(傍点引用者)る「喉から胸へかけての皮膚」、「強靱な殻を作りながらねじれる」「脂ぎって太い首」(傍点引用者)、そして、「腐蝕性の毒のようにあらゆるものにしみとおつてくる」(「体臭」(傍点引用者)など、野性的強靱さと動物的臭味によって満たされている。しかし、これらの特徴は「僕」に黒人兵への嫌悪感を抱かせるものとはならない。黒人兵の「体臭」は「僕の頬をはてらせ、狂気のような感情」を喚び起こすのである。この感情は残酷放恣な絶対的支配下に黒人兵を置いて快味を満喫しようとする官能的情動と解することができる。

子供たちの世界において、珍奇な物品、動物、植物などを入手することがとりわけ大きな意味を持つものであることは、「胸にかさる記章に使える」「死者の骨」に見せる「僕」の執着とか「山犬」の仔を捕獲した「兎口」の誇りの中に具体的に確認することができるが、「咬み傷」を負った腕を前に

突き出し、「ほら」と「重おもしろいっ」て仔犬を「僕」らに見せる「兎口」の得意な姿勢は、「躰中」を「咬みつかれ」る躰の危険を冒して入手した稀小価値のある捕獲物への誇りを支えとしたものに外ならない。「朝と夜一度ずつ黒人兵に食事を運ぶ」任務を「特権的な仕事」と考える「僕」の得意な気持も、当然、黒人兵の危険性と無気味さの齷す恐怖と不安の緊張感を克服し得てはじめて務まる特例の仕事への誇りが、大きな支えになっていると見て差し支えあるまい。この誇りと動物の野人に転落した黒人兵の「腐蝕性の毒のよう」な「体臭」の掻き立てる「狂気のような感情」と、そして、「あらゆる子供たち」の「怨嗟」「羨望」とが交錯して生まれる、自己中心の絶対的支配体制への確立志向は、黒人兵の「僕」に与えた第二の大きな影響と考えられる。

「僕」中心の絶対的支配体制への確立行動が、山村共同体の大人の秩序体制を侵犯しはじめることは避けられないことである。侵犯の第一歩は「町役場からの遅い指示」を待ちかねて、「黒人兵の監視を引受けた僕の父さえ、猟に出はじめ」た時である。この時点から、黒人兵は「どんな保留条件もなしに、ただ子供たちの日常をみたくすためにだけ、地下倉の中で生きはじめ」るのである。

大人たちには憎悪すべき危険な敵兵であり、また、嫌悪すべき「獣」に過ぎないものであるにもかかわらず、「獣のように飼う」と思うだけで「躰」に掻き立てる黒人兵は、村に抑留されることになった最初、巨大で瘴猛で危険性を持ちながらも馴らし甲斐のある珍奇な野生動物として「僕」の心を捉えたことになる。ところが、地下倉に蹲る黒人兵の前に最初の食事を置いた時点の「僕」には、黒人兵が貧しい山村共同体の生活文化を軽侮し黙殺する無気味な外在他者として「僕」の心を圧倒し、耐えがたい「羞恥の感情」を喚び起こすのである。この時点の黒人兵は「僕」にとって単なる「動物」ではあり得ない。見も知らぬ外在文化の無気味な脅威を暗示するものである。やがて、黒人兵は「力にみちた咀嚼」で「食事に没頭し」はじめるのであるが、「僕」がこれを「見守」りながら、黒人兵を「すばらしい《獲物》」と

感嘆し、そして、「狂気のような感情」を抱く時、黒人兵は「僕」の絶対支配の生活体制の中心に引き据えられたと見なければならぬ。「すばらしい《獲物》」・黒人兵の危険性と無気味さが齷す恐怖と不安の緊張感と戦いながらその「獲物」を飼い馴らし、そして、「僕」の「特権的な仕事」に「羨望の熱い吐息」を吐く村の子供たちの前に、その大いなる成果を誇示して暮らす夢を「僕」が描く時、「狂気のような感情」は「僕」の胸中で一層大きな昂揚を見せはじめていたと言えよう。

「黒人兵を見ることにあき」足りながら、「特権的な場所」を「放棄」せず、村の子供たちから「代償の子約」を取る横暴な権限、子供たちの「羨望の吐息」を意識しながら「特権的な仕事」をつづける自己誇示の虚栄、「僕」と「兎口」と「弟」が地下倉の中で「黒人兵を囲んで坐」る特権、村の子供たちが「羨望のあまりに我を忘れ」「地下倉へ入って来ようとする」時の残酷な報復、黒人兵の糞尿運びの担当者「尊大に指名」する強大な権力、そして、「喜びに頬を輝かせ」て糞尿運びに励む子供たちの哀れな充足感……、巨大で無気味で危険な「外在他者」を「休日」の「遊び」の世界の中心に据え、反射的な自然情動と特権者の自負心を満足させようとする「僕」の、絶対支配下にあるこの生活体制は、豊かな自然の生命力と合体しながら凄絶奔放な政治力学を築きあげていくとともに、閉鎖的な山村共同体の中で大人たちが枯渇させようとしている「命の源泉」を採り当てていくのである。この「政治力学」の構築と「命の源泉」の発見は、黒人兵が「僕」に与えた第三の影響として見逃すことはできない。

三 「僕」の生活体制の崩壊と新たな「他者」

黒人兵を中心に据えた「僕」の絶対支配の生活体制が崩壊したのは、黒人兵を村に抑留しておく臨時措置を採らねばならなかった事情が解決され、黒人兵を「梟に引きわたすことになった」ためであるが、問題の核心は、その新たな事態を受けとめる「大人たち」の気持と「子供たち」との間の隔りである。「黒人兵を運びおろすという作業によってひきおこされる」危険性を「迷惑」に感じるだけの大人たちは、「黒人兵を引渡す、そのあと、村に何

が残るだろう、夏が空虚な脱けがらになってしまふ」と思う子供たちの「驚き」と「失望」を理解し得るはずもない。黒人兵に与える「僕」の「注意」はこの隔りから生じた善意と言ってよからう。作者・大江健三郎は、大人たちの外在的勢力に見せる対応姿勢の特徴については、黒人兵の捕縛時点より注意深く描きあげている。

墜落機より脱出した一人の黒人兵を山林で捕縛して帰る大人たちは、「冬の猪狩の時のように重おもしろく唇をひきしめて『獲物』を囲み、殆ど哀しげに背を屈めて歩いて」おり、また、分教場で会議を持った後、再び歩きはじめた時にも、言葉をお口にするものはいない。翌朝、黒人兵の処置についての指示を町役場に受けに行く途上、黒人兵の処置の見通しについて訊ねる「僕」に返す「唸るよう」な応答と沈黙、そして帰る途上、町役場の「責任のがれの対応姿勢に立腹して吐き出す罵声と感情を胸中に鬱屈させる沈黙、さらには、「書記」が村に来て町役場の方針を述べる「命令的な口調」を前に、「弱よわしくそれに屈伏」する服従……、これらの暗く重い沈黙は村の大人たちの重要な特徴となっている。つまり、これは「谷間」に「深く」「喰いこんでいる」「静寂の木の根」の広げる沈黙に外ならない。この沈黙の背後に鬱屈する大人たちの内的世界の特徴を探る手掛りは、『不意の啞』の中に見出すことができる。

水泳中に靴を紛失した通訳が、その紛失責任をとらせようとして部落長を呼び寄せた時、部落長は次のような対応を見せている。

《「泳いでいる間に靴をぬすまれた、あなたの村のことはあなたに責任がある。靴をとりもどしてくれ」／(+)少年の父親は回答するまにに村の大人たちをふりかえった。父親はそれからゆっくり通訳へむきなおって頭をふった。／(略)／「盗まれたのかどうかかわからない」と父親はいった。

「流れたのかもしれない」／「おれは砂の上に服といっしょに脱いでおいた。それは確かだ。流れるわけがない」／(□)父親はもういちど振りかえり子供らと大人たちすべてにいった。／「お前ら、靴をぬすんだ奴がいるか？」

そしてかれは通訳にいった。「居ないらしい」／(○)「子供だましをするな」と通訳がいきりたつていった。《(『不意の啞』傍線引用者)

傍線部(+)における「父親」が、通訳の靴紛失の事情説明に対する村人の反応を確認した後、「ゆっくり通訳へむきなおって頭をふ」る対応の仕方には、村人の中に靴を盗んだ者がいるかどうかを正確に検証しようとする姿勢を読み取ることはできない。これは傍線部(□)における「父親」の対応の仕方についても言えることである。通訳が傍線部(○)において、「子供だましをするな」と立腹するのは当然の成り行きと言わなければならぬ。この時点における「父親」は、村人の潔癖さを信頼して通訳と対決しているのではなく、村人が通訳に対する反感を自分と同じように抱いているという共通意識を確認して、通訳の威丈高な支配者意識と対決しているのである。

進駐軍の通訳の仕事をしているうちに、いつの間にか進駐軍兵士と同じような占領者意識を持つようになり、同胞の日本人を見下す威丈高な態度とか進駐軍兵士と対等に付き合ひ得る得意げな示威行為を見せる通訳は、村人にとっては、唾棄すべき嫌悪の対象であるばかりでなく、山村共同体の平穏な日常的調和を揺がす脅威でもあると言えよう。問題はこの巨大で無気味で危険な外在的「他者」の脅威に対抗する村人の暗い「内向的力学」と陰惨な報復行動である。

己れの面目保持のために靴の探索を執拗に要求する通訳に業を煮して反抗する部落長が、進駐軍兵士の銃撃によって死亡した時、村の大人たちおよび子供たちは、通訳の掛けてよこす「逆上した声」に「誰一人こたえ」ず、「みんな黙りこんだ通訳を見つめているだけ」であるが、この「沈黙」の中で用意されていく復讐のための殺害計画は、閉鎖的な村落共同体の緊密な連帯感を支えに実現するものであり、内部勢力を結集させる「内向的力学」が強く働いていると見ることができるといえる。この「力学」構造は少年の心をも吸引する支配力を持っており、銃殺された部落長の息子の「少年」は、恐怖と罪意識の緊張感に逡巡しながらも、結局は、大人たちの計画する復讐のための殺害行動に参加していくのである。

《大人たちが樫の木立にかくれたと思うと、すぐかれらは少年の家の土間へ通じる板戸を声もかけずに押しひらき、そのままそこへむらがつて黙ったまま少年を見つめた。少年はかれを抱きしめている母親が震えはじめる

のを感じ、たちまちそれに感染されて自分も身ぶるいを始めた。／＼しかしこれは母親の腕を自分の体からほどき立ちあがった。(略)／＼道が石灰岩をとるために開かれた小さな採石場の前の平坦な場所ので二股にわかれる。

(略)そこで大人たちの不精鬚におおわれた、貧しく陰険な顔が緊張にゆがみながら少年を見おろした。かれらは黙りこんだまま少年を見つめていた。／＼少年は震えをおさえるために自分の体をだきしめ、大人たちに背後から見つめられるのを感じながら(略)駆けた。(「同」傍点引用者)

この『不意の啞』の村人の重い「沈黙」と暗い「内向的力学」は、黒人兵の扱いについての町役場の指示に不満を抱きながら屈伏する『飼育』の村の大人たちにもそのまま認めることができるものである。しかし、『飼育』の主人公・「僕」は、巨大な外在的「他者」・黒人兵との閉ざされた生活時間の中で、大人たちの枯渇させようとしている「命の源泉」を探り当て、『不意の啞』の「少年」のように大人たちの重い「沈黙」と暗い「内向的力学」に吸引されてしまうことではないのである。黒人兵を「罾に引きわたすことになった」時、「驚き」と「失望」を感じると同時に黒人兵の危機状況を察知して彼に「注意」を与える「僕」の心情には、外在的な「他者」との対決を契機に山村共同体の閉鎖的な「生活倫理」と「生活感情」からの脱却を図ろうとする、作者・大江健三郎自身の切実なモチーフが働いていると言えるのではなからうか。

「町役場からの違い指示」を待ちかねて、「黒人兵の監視を引き受けた僕の父さえ、罾に出はじめ」てから、昼間黒人兵を監視することが子供たちに「委ねられた」「職務でもある」ように、「平然として、黒人兵の坐っている地下倉へこもる習慣」、「猪鬣にしめつけられた足首の皮膚が剥がれ」て「起」す「炎症」の痛みに対する同情、「黒い鈍重な獣のようにいつも眼を涙か脂かほつきりしない濃い液体でうるおし、膝をかかえこんで」「坐り黙っている」「一匹の黒んぼ」(傍点引用者)への安心感、猪鬣の除去、破損した猪鬣の修繕を思い立った黒人兵の修繕器具の要求に伴うはじめての対話、黒人兵が用意した「道具箱を見つめ、それから僕たちの眼を見つめ」る時の「ぞくぞくする喜び」、黒人兵の「規則正しくならべ」た道具の「傍に坐る

僕らを見て」「頬がゆるむ」黒人兵の笑いにより、「殆ど《人間的》なきずなで結びついたことに気づく」(傍点引用者)満足感、事故に遭遇して破損した「書記」の義足を黒人兵に修理させ、修理を終えると、その調子を「広場」で確める「書記」の後を追いつ、「それが以前からの習慣でもあったように少しもためらわず、黒人兵を「広場」に連れ出す信頼と喜び、「地上に思いのまま出歩く黒人兵が「猪鬣や子供たちや樹々と同じように、村の生活の一つの成分になろうとしてい」る村との融和、「父の馳処理の技術を核にし」て生じる「僕」と「弟」と「黒人兵」と「父」との「一つの家族のよう」な結びつき、そして、「光り輝く逞しい筋肉をあらわした」黒人兵を中心に興じる「古代めいた水浴」の歓喜に満ちた生命の律動と充滿……、この黒人兵に寄せる「僕」の心情的変化は、制度化された倫理規範に則る意志的なものと言いうことはできない。すでに見てきたように、黒人兵を中心に据える「僕」の絶対支配的な生活体制は、豊かな自然の生命力と合体しながら、妻絶奔放な政治力学を築きあげており、「僕」に充足感を齎すものはこの力学構造の中で反射的に生じ昂揚する自然情動に外ならない。大人たちの枯渇させようとしている「命の源泉」は、この昂揚する自然情動そのものの中に体感し得るものと言えよう。

「僕」の悲劇は、黒人兵という巨大で無気味で危険な「外在他者」を中核に据え、自己固有の反日常的な新生活を築きあげ、そして、山村共同体の重い「沈黙」と暗い「内向的力学」を超越した新たな生の方向を開きながらも、「死」および「狂気」という思いもかけない巨大な「他者」の出現により、反日常の世界で探り当てた「命の源泉」を枯渇させ、さらに、帰還していく精神的拠所をも喪失しなければならなかったことである。

「命の源泉」の枯渇は、黒人兵が「彼の躰へ僕をしっかりとだきしめ」て、村の大人たちの向ける「銃孔から彼自身を守」ろうとし、「怒りと、屈辱と裏切られた苛立たしい哀しみが僕の躰を火のように走りまわり焦げつかせた」時に始まっており、帰還する精神的拠所の喪失は、「僕」が「苦い屈辱」の中で「黒人兵に絞め殺されるのを見殺しに」するように、「揚蓋を碎」きつづける大人たちの「作業」の中に見えるはじめてい。そして、「命の源泉」

の枯渇と精神的拠所の喪失を決定づけたのは、「僕」の「左掌」と黒人兵の「頭蓋」を打ち砕く「父」の「鉦」である。

《僕は空腹にかりたてられていたが、山羊の乳をいれた水さしを父の手が僕の唇へあてがうと、嘔気が僕を揺動かし、僕は喚きたてながら口をつぐんで、山羊の乳を喉や胸にしたらせた。父を含めて、あらゆる大人たちが僕には我慢できないのだ。歯を剥きだし、鉦をふるって僕に襲いかかった大人たち、それは奇怪で、僕の理解を拒み、嘔気を感じさせる。僕は父たちが部屋を出て行くまで喚きつづけた。》(傍点引用者)

「命の源泉」の枯渇と精神的拠所の喪失を前にして、「僕」の新たに對峙しなければならぬ、巨大で無気味で危険な外在的他者は「死」であり、内在的他者は「死」に伴う「狂気」に外ならない。子供たちの「休日」の「遊び」の時間とか大人たちの日常生活時間の中には見当らない「死」と「狂気」である。

むすび

サルトルの『嘔吐』の主人公・ロカンタンにとって、「嘔吐」という生理作用は、^{注④}「存在が仮面を捨てて、その真の意味を感じさせる場合の、意識の変化を意味するもの」であるが、『飼育』の「僕」の「嘔吐」もこれと同一の意味を持つものと言ってよからう。黒人兵という巨大で無気味で危険な「外在他者」を中核に据え、自己固有の反日常的な新生活を築きあげ、そして、閉鎖的な山村共同体の重い「沈黙」と暗い「内向的力学」を超越して「僕」の探り当てた、明るく弾ける生の歓喜と温かな人間的信頼の絆は、「父」と「書記」の心をも、黒人兵という「外在他者」に向って開かせはじめるのであるが、この明るい命の律動と歓喜に満ちた生の充足が、突如、大人たちの「狂気」によって破壊される時、その大人たちの破壊行為が「僕」に「奇怪で」「理解を拒む」不条理なものに映るのは当然のことと言わなければならない。「僕」は人間の営む生の不条理を否認なく理解しなければならなかったのである。

謎に満ち、無気味で危険な人間の生の不条理を「僕」に理解させた作者・

大江健三郎は、「書記」とともにその不条理な生の混沌に僅かな輪郭を与えようとしている。

《おい、元氣を取戻したか、蛙／僕は背後から、乾いた熱い掌で頭を押しつけられたが、振りむいて立上ろうとはしなかった。僕は斜面の子供らの遊びに顔を向けたまま、眼だけで僕の裸の臍の横にしつかり立っている。書記の黒い義肢を窺った。書記さえ、ただ傍に来るだけで僕の喉を乾かせる。／(略)／戦争も、こうなるとひどいものだ。子供の指まで叩きつづす」と書記がいった。戦争、血まみれの大規模な長い闘い、(略)それは決して僕らの村へは届いていない筈の戦争。ところが、それが僕の指と掌をぐしゃぐしゃに叩きつづすに來る、父が鉦をふるって戦争の血に身を酔わせながら。そして、急に村は戦争におおいつくされ、その雑沓の中で僕は息もつけない。》(傍点引用者)

「僕」にとって、町役場の「椅子に坐っている書記の義肢は《町》の子供たちと同じように、きみが悪くて危険」なものであったが、「丈夫な右足と義肢と、一本きりの松葉杖で山道を跳ねて来る」「書記」の姿は、常々「好き」なものとして眺めていたものである。とりわけ、「鬼口」から「お前のぐしゃぐしゃになった掌」が「ひどく臭う」と侮蔑的に言葉浴びせかけられている時点の「僕」にとっては、「黒い義肢」に潜む「書記」の心の痛みは明瞭に見えていたはずである。その「書記さえ、ただ傍に来るだけで」「喉」の「乾」きを感じなければならぬ「僕」は、激しい衝動的痛みの中で、「猶子の期間」と訣別し、冷厳な批評眼をもって不条理な生の混沌を見据えていたのだと言えよう。

「決して」「村へは届いてこない筈の戦争」が「村」を「おおいつく」していることよって、「指と掌をぐしゃぐしゃに叩きつづ」されたことを認識する「僕」の「息もつけない」ような思いには、戦後の歴史的成果を空無化していく危険な時代の趨勢を真摯に受けとめる作者・大江健三郎の^{注⑤}「反戦思想」を核とする形象モチーフを見出すこともできるが、「書記」に対しても心を塞ぎつづける「僕」の深い孤独の寂寥には、豊かな自然の生命力と合体しながら凄絶奔放な政治力学を築きあげ、そして、大人たちが閉鎖的な

山村共同体の中で枯渇させようとしている「命の源泉」を探り当てた生の充足を、突如喪失しなければならなかったことによる生への「絶望」が重い余情として覗いており、反戦的モチーフはこの重い余情の中に包み込まれていると言わなければならない。

ここには、眼前の切実な時代的モチーフと真摯に対決しながらも、それを自己の生い立つ精神風土の中に解き放ち、そして、複雑に交錯する生の主要な力学構造を、無限に共鳴連鎖して生動する奥行き深い「森林」的生命体として感性豊かに造形しようとする、大江健三郎の作家的原拠を見出すことができると言えるのではなからうか。

注

- (1) 『「死者の奢り・飼育」解説』（新潮文庫「死者の奢り・飼育」《昭和34・9、新潮社、二四七頁》）
- (2) 鈴木秀夫氏は、「森林的思考」の特徴の一つとして、「森林のなかでは時間は無限であり、万物流転、すべてのものはくり返している。目にみえないところまで、いずれ、さちっと、知識が積み上げられてゆくであろう」という考えに基づく「法則定立への強い志向」を指摘されている。（『森林の思考・砂漠の思考』《昭和53・11、日本放送出版協会、三三三頁》）
- (3) ロバート・ロルフ氏は、「『飼育』（一九五八年）はその語り手が少年の頃に無垢を喪失し経験を得る物語である」と論じておられる。（『「飼育」に於ける無垢の喪失』『大江健三郎文学 海外の評価』、昭和62・1、創林社、一三三二頁）
- (4) 佐藤朔『サルトルと「嘔吐」』（『現代世界文学全集第二〇巻、解説』昭和28・7、新潮社、五頁）
- (5) 野間宏氏は、「『飼育』に於てはなお戦争をすすめる社会とそのなかにとじこめられる人間との関係を明にする手続は十分ではなかった」とさ
れている。（『方法の問題』《「群像」、昭和33・7、講談社、一三三頁》）

昭和六十三年十一月十日受付

平成元年三月十六日受理